

令和4年度の病害虫発生に関する情報

徳 島 県

(徳島県立農林水産総合技術支援センター経営推進課 田村 収)

1. 新病害虫の発生

(1) タバコノミハムシ (令和4年8月10日特殊報)

令和4年6月13日、名西郡石井町のナス圃場においてナスの葉を加害するハムシ類の成虫が確認された。採集した個体を農林水産省神戸植物防疫所へ同定を依頼した結果、本県では未発生のタバコノミハムシであると同定された。

本種は中央～北アメリカを原産とする外来種で、国内ではこれまでに計23府県で発生が報告され、ナス、トマト、パレイショ、ホオズキ等の農作物での被害が報告されている。

(2) フタテンミドリヒメヨコバイ (令和4年9月27日特殊報)

令和4年9月、海部郡海陽町のオクラ圃場において、葉の黄化及び萎縮症状が認められた。被害葉上には、翅末端に一对の黒点があるヨコバイ類の寄生が確認された。虫体を採取し、農林水産省神戸植物防疫所に同定を依頼した結果、本県では未発生のフタテンミドリヒメヨコバイと同定された。

国内では沖縄県のオクラで発生が確認されているほか、平成17年に東京都のナス、オクラ、ハイビスカスで本種による被害が報告されている。また、令和2年には熊本県のオクラ、令和3年には高知県のナスで被害が報告されている。

2. 水稲

(1) いもち病

梅雨入りが6月11日と平年(6月5日)より遅く、早期作では葉いもちは、平年より遅い6月6半旬より発生を認め、7月3半旬まで発生圃場率が17.6～41.2%、発病度が0.4～2.1と、平年(19.5～39.9%、0.9～3.0)並の発生であった。穂いもちは、平年よりやや遅い8月3半旬に発生を認め、発生圃場率が33.3%、発病穂率は0.1%と、平年(24.7%、0.3%)並であった。

普通期作では葉いもちは、早期作と同様に平年より遅い6月6半旬より発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率が17.4～52.2%、発病度が0.2～4.1

と、平年(6.0～52.0%、0.2～4.8)並であった。穂いもちは、平年並の8月3半旬に発生を認め、9月3半旬まで発生圃場率が8.7～30.0%、発病穂率が0.0～0.2%と、平年(10.4～40.2%、0.1～0.5%)に比べてやや低かった。

(2) 紋枯病

早期作では、平年より遅い7月3半旬に発生を認め、発生圃場率が5.9%、発病度が0.4と、平年(20.8%、1.3)よりやや低かった。その後、8月3半旬まで、発生圃場率が23.5～33.3%、発病度が0.5～3.1と、平年(27.1～27.6%、1.4～2.3)並で推移した。

普通期作では、平年並の7月3半旬に発生を認め、9月3半旬まで発生圃場率が60.0～75.0%、発病度が5.4～6.0と、平年(64.6～69.7%、5.8～6.8)並であった。

(3) 縞葉枯病

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(4) 稲こうじ病

県西部の普通期作で、平年並の9月3半旬に発生を認め、発生圃場率が50.0%、発病株率が6.4%と、平年(19.5%、4.2%)に比べて高く、甚発生の圃場も認められた。

(5) セジロウンカ

早期作では、平年より遅い7月3半旬より発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が5.9～35.3%、株当たり虫数が0.0頭と、平年(39.6～53.2%、0.0～0.1頭)に比べて低かった。

普通期作では、平年よりやや遅い6月6半旬より発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が4.3～43.8%、株当たり虫数が0.0～0.1頭と、平年(13.9～76.2%、0.0～0.4頭)に比べて低かった。

(6) トビイロウンカ

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(7) 斑点米カメムシ類

早期作では、平年並の6月6半旬に発生を認め、7月3半旬までの水田周辺雑草地における発生地点率が58.8～76.5%と、平年(57.5～61.8%)に比べてやや高く、寄生虫数(20回振り)が2.1～5.5頭と、平年(5.7～6.3頭)並であった。その後の本田調査

では、平年並の7月6半旬に発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が33.3～58.8%と、寄生虫数(20回振り)は0.7～1.1頭と、平年(33.0～42.8%, 0.7～1.1頭)に比べてやや高かった。

普通期作では、平年並の7月3半旬に発生を認め、7月6半旬までの水田周辺雑草地における発生地点率が69.6～82.6%, 寄生虫数(20回振り)が9.2～16.5頭と、平年(69.7～73.2%, 7.8～7.9頭)に比べて高かったため、県西部を対象に令和4年8月1日付けで技術情報を発表した。その後の本田調査では、平年並の8月3半旬に発生を認め、9月3半旬まで発生圃場率が52.2～62.5%, 寄生虫数(20回振り)が2.3～2.6頭と、平年(40.4～44.2%, 1.5～1.8頭)に比べて高かった。

多発生の要因として、6月から8月にかけて、降水量が平年に比べて少なかったことが、発生量に影響したと考えられた。

(8) コブノメイガ

早期作では、発生は認められなかった。

普通期作では、平年よりやや遅い7月6半旬に発生を認め、9月3半旬まで、発生圃場率が10.0～12.5%, 被害葉率0.0%と、平年(19.1～23.1%, 0.7～0.8%)に比べてやや低かった。

(9) ヒメトビウンカ

早期作では、平年よりやや遅い6月6半旬に発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率11.8～47.1%, 株当たり虫数が0.0頭と、平年(26.5～54.1%, 0.0～0.1頭)に比べてやや低かった。

普通期作では、平年並の6月3半旬に発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が5.0～75.0%, 株当たり虫数が0.0～0.2頭と、平年(10.2～89.3%, 0.0～0.6頭)に比べてやや低かった。

3. 果樹

(1) 果樹共通・カメムシ類

2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2か所調査)では、8地点で越冬を確認し、越冬成虫は1.0頭/m²であり、平年(2.4頭/m²)並であった。

予察灯における初誘殺は、勝浦町では平年(4月22日)より8日早い4月14日に、上板町では平年(4月22日)より9日早い4月13日に確認した。

上板町での誘殺数は、4月第3半旬まで平年並に推移していたが、その後増加し、4月第4半旬から5月第1半旬の誘殺数が、チャバネアオカメムシが275頭と平年(12頭)の22.9倍誘殺されたため、令

和4年5月10日付けで技術情報を発表した。さらに、6月第6半旬から7月第1半旬かけて、チャバネアオカメムシの誘殺数が、上板町で2,462頭と平年(54頭)の45.6倍、勝浦町で808頭と平年(56頭)の14.4倍誘殺されたため、令和4年7月8日付けで注意報を発令した。その後、上板町と勝浦町の誘殺数は、平年に比べて多く推移していたが、8月4半旬以降は平年並に推移した。

多発生の要因として、6月中旬から8月上旬にかけて、降水量が平年に比べて少なかったことが、越冬後の世代の発育に好適な条件となったと考えられた。

なお、県北部のカキ圃場における巡回調査では、10月3半旬に被害を認め、発生圃場率が83.3%, 被害果率が7.0%, 平年(40.7%, 1.7%)に比べて高かった。

(2) かんきつ(温州みかん、すだち)・そうか病

3月4半旬の温州みかん圃場における旧葉での越冬病斑発生圃場率が12.5%, 発病度が0.3と、平年(34.2%, 0.3)に比べて低かった。

その後、4月の平均気温及び湿度が平年に比べて高かったことが影響し、春葉での発病は、平年並の5月3半旬に認めた後、8月3半旬まで発生圃場率が31.3～75.0%, 発病度が0.1～1.1と、平年(6.3～20.0%, 0.1～0.2)に比べて高かった。果実での発病は、平年並の6月3半旬に認め、8月3半旬まで発生圃場率が25.0～75.0%, 発病度が0.1～0.8と、平年(18.8～32.4%, 0.4～1.3)に比べて高かった。

(3) かんきつ(温州みかんのみ)・黒点病

5月3半旬に調査した枯れ枝から黒点病菌が確認された圃場率は50.0%で、枯れ枝中のα型孢子数は0.8～2.7×10⁵個/mlであった(前年:37.5%, 0.8～1.6×10⁵個/ml)。

7月3半旬の果実での発生圃場率は25.0%, 発病度が0.1と、平年(31.3%, 1.7)並であり、11月3半旬の調査では、発生圃場率が87.5%, 発病度が1.8と、平年(84.1%, 7.0)並であった。

(4) かんきつ(スダチのみ)・かいよう病

5月3半旬の旧葉での発生圃場率が62.5%, 発病度が0.4と、平年(68.9%, 2.7)並の発生であった。

春葉では平年並の6月3半旬に発生を認め、発生圃場率が75.0%, 発病度が0.8と、平年(61.9%, 1.3)並の発生であった。果実では、8月3半旬の発生圃場率が62.5%, 発病度が1.0と、平年(91.4%, 4.6)に比べてやや低かった。

(5) かんきつ・ミカンハダニ

旧葉における発生は、5月3半旬では発生圃場率が31.3%、寄生葉率が4.2%と、平年(47.6%, 8.6%)に比べてやや低かった。

春葉での発生は、平年並の6月3半旬に発生を認め、9月6半旬まで発生圃場率が25.0～75.0%、寄生葉率が0.3～10.8%と、平年(49.8～62.5%, 4.4～7.5%)並であった。

(6) なし・黒星病

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(7) なし・赤星病

平年よりやや遅い5月3半旬より発生を認め、6月3半旬まで発生圃場率が87.5～100%、発病葉率が4.1～8.3%と、平年(73.8～86.3%, 8.6～11.2%)並であった。

(8) なし・うどんこ病

平年より遅い8月3半旬より発生を認め、9月3半旬まで発生圃場率が25.0～62.5%、発病程度が0.6～6.6と、平年(45.5～87.9%, 0.8～8.3%)に比べてやや低かった。

(9) なし・ナシヒメシンクイ

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

また、フェロモントラップへの誘殺は、4月1半旬から6月3半旬までは324頭と、平年(136頭)に比べてやや多かったが、その後は、平年並に推移した。

(10) なし・ハダニ類

平年よりやや遅い6月6半旬に発生を認め、9月3半旬まで発生圃場率が12.5～75.0%、寄生葉率が0.1～10.6%と、平年(15.0～66.8%, 1.0～13.7%)並であった。

(11) なし・アブラムシ類

平年並の5月3半旬に発生を認め、6月6半旬まで発生圃場率が25.0～62.5%、寄生新梢率が1.3～10.2%と、平年(26.3～45.0%, 1.5～6.8%)に比べてやや高かった。多発生の要因として、5月上旬及び6月の降水量が平年に比べて少なかったことが、発生量に影響したと考えられた。

(12) かき・炭そ病

3月の越冬病斑及び5月以降の新梢における発生は認められなかった。果実での発病は平年よりやや遅い9月6半旬に発生を認め、10月3半旬まで発生圃場率が16.7%、発病果率が0.2%と、平年(17.0～26.7%, 0.4～0.5%)並であった。

(13) キウイフルーツ・かいよう病

発生を認めていない。

4. 野菜

(1) サツマイモ・アブラムシ類

平年並の5月6半旬に発生を認め、7月3半旬まで発生圃場率が6.3～63.6%、寄生株率が0.5～8.7%と、平年(40.0～60.0%, 6.0～19.3%)に比べてやや低かった。

(2) サツマイモ・ハスモンヨトウ

平年並の6月6半旬に発生を認め、7月3半旬まで発生圃場率が6.3～18.8%、生息虫数が0.1～0.2頭と、平年(1.9～6.3%, 0.1頭)に比べてやや高かったが、その後は、8月3半旬まで認められなかった。また、フェロモントラップへの誘殺数は、5月から8月まで425頭と、平年(1,156頭)に比べて少なく推移した。

(3) サツマイモ・シロイチモジヨトウ

平年並の6月6半旬に発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が0～12.5%、生息虫数が0～0.1頭と、平年(3.8～11.8%, 0.1～0.3頭)並であった。また、フェロモントラップへの誘殺数は、5月1半旬から7月6半旬まで1,311頭と、平年(1,380頭)並に推移していたが、その後、8月1半旬以降8月6半旬まで1,598頭と、平年(2,131頭)に比べてやや少なく推移した。

(4) サツマイモ・ナカジロシタバ

平年並の6月6半旬に発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率が12.5～31.3%、生息虫数が0.2～2.5頭と、平年(5.0～20.5%, 0.1～0.5頭)に比べてやや高かったが、8月3半旬には発生は認められなかった。

(5) サツマイモ・ハダニ類

平年並の5月6半旬に発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が25.0～33.3%、寄生株率が0.4～10.4%と、平年(11.1～70.6%, 0.9～15.8%)に比べてやや低かった。

(6) 冬春トマト・疫病(令和3年度産)

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(7) 冬春トマト・灰色かび病(令和3年度産)

平年並の12月6半旬に発生を認め、発生圃場率が12.5%、発病度が0.1と、平年(3.4%, 0.2)に比べてやや高かったが、その後、発生は認められなかった。

(8) 冬春トマト・葉かび病(令和3年度産)

平年並の12月6半旬に発生を認め、発生圃場率が12.5%、発病度が0.1と、平年(4.0%, 0.2)に比べてやや高かったが、その後、発生は認められなかった。

(9) 冬春トマト・タバココナジラミ（令和3年度産）

平年並の10月6半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が50.0～100%、寄生株率が5.6～19.9%と、平年(34.1～55.7%, 1.0～3.9%)に比べて高かったことから、10月29日付けで注意報を発令した。多発生の要因として、令和3年10月及び令和4年3月の平均気温が平年に比べて高く、露地からの侵入が増加したことが影響したと考えられた。

(10) 夏秋ナス・うどんこ病

平年より遅い7月6半旬に発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が14.3～42.9%、発病葉率が0.1～1.7%と、平年(32.9～57.1%, 1.7～6.9%)に比べてやや低かった。

(11) 夏秋ナス・ハスモンヨトウ

平年よりやや遅い7月3半旬に発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が42.9～100%、被害度が1.6～7.6と、平年(1.2～10.2%, 0.0～0.2%)に比べて高かった。果実での発生は、7月6半旬に認め、8月6半旬まで発生圃場率が28.6～57.1%、被害果率が1.1～1.4%と、平年(2.5～7.7%, 0.0～0.2%)に比べて高かった。また、6月から8月のフェロモントラップ定点調査での誘殺数は、平年並に推移した。

(12) 夏秋ナス・ミナミキイロアザミウマ

平年並の6月6半旬に発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率が14.3～42.9%、寄生葉率が0.3～0.9%と、平年(55.1～58.5%, 3.1～7.5%)に比べてやや低かった。その後、8月6半旬には発生は認められなかった。また、果実での発生は、7月6半旬に認め、8月6半旬まで発生圃場率が42.9～57.1%、被害果率が1.1～4.6%と、平年(20.6～26.2%, 2.0～3.2%)に比べてやや高かった。

(13) 夏秋ナス・アブラムシ類

平年並の6月6半旬に発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が0～14.3%、1葉当たりの寄生虫数が0～0.1頭と、平年(3.2～29.7%, 0.0～0.3頭)に比べてやや低かった。

(14) 夏秋ナス・オオタバコガ

平年より遅い8月6半旬に卵の産下を認め、発生圃場率が71.4%、産下卵率が0.9%と、平年(24.4%, 0.4%)に比べて高かった。被害果実は、平年並の6月6半旬に認め、8月6半旬まで発生圃場率が0～28.6%、被害果率が0～0.4%と、平年(1.9～5.8%, 0.0～0.1%)に比べて高かった。

また、フェロモントラップ定点調査では、4月1

半旬から6月5半旬までは平年並に推移していたが、6月6半旬より増加し、8月第5半旬には誘殺数が平均で48.7頭と、平年(18.2頭)の約2.7倍となったことから、8月31日付けで技術情報を発表した。多発生の要因として、6月から8月まで降水量が少なかったことが影響したと考えられた。

(15) 冬春ナス・うどんこ病（令和3年度産）

平年並の10月6半旬に発生を認め、1月6半旬まで発生圃場率が14.3～42.9%、被害葉率が0.4～3.4%と、平年(3.3～44.8%, 0.6～3.3%)に比べてやや高かったが、その後、発生は認められなかった。

(16) 冬春ナス・灰色かび病（令和3年度産）

葉での発生は、平年並の1月6半旬に発生を認め、発生圃場率が14.3%、被害葉率が0.1%と、平年(11.4%, 0.9%)並の発生であった。果実では、平年よりやや遅い1月6半旬に発生を認め、2月6半旬まで発生圃場率が14.3%、発病果率が0.1～0.4%と、平年(8.8～10.2%, 0.2%)に比べてやや高かったが、その後、発生は認められなかった。

(17) 冬春ナス・すすかび病（令和3年度産）

平年より遅い12月4半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が28.6～100%、発病葉率が1.3～19.9%と、平年(27.6～77.0%, 2.5～10.8%)並であった。

(18) 冬春ナス・ミナミキイロアザミウマ（令和3年度産）

平年並の10月6半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が0～28.6%、寄生葉率が0～0.3%と、平年(43.6～67.6%, 5.5～14.5%)に比べて低かった。なお、被害果は巡回調査圃場で発生は認められなかった。

(19) 冬春ナス・タバココナジラミ（令和3年度産）

平年並の10月6半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が71.4～100%、寄生葉率が14.0～43.3%と、平年(28.3～84.9%, 2.5～12.9%)に比べて高かった。

(20) 冬春ナス・ハダニ類（令和3年度産）

平年より遅い12月4半旬に発生を認め、3月6半旬まで発生圃場率が14.3～28.6%、寄生葉率が0.6～4.3%と、平年(1.4～11.2%, 0.0～0.2%)に比べて高かったが、その後、発生は認められなかった。

(21) 冬春キュウリ・べと病（令和3年度産）

平年並の12月4半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が11.1～100%、発病葉率が0.1～15.4%と、平年(24.3～80.4%, 1.5～21.5%)並であつ

た。

(22) 冬春キュウリ・うどんこ病 (令和3年度産)

平年よりやや遅い12月4半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が22.2～62.5%、発病葉率が0.3～5.1%と、平年(46.7～75.4%, 3.7～18.9%)に比べてやや低かった。

(23) 冬春キュウリ・褐斑病 (令和3年度産)

平年よりやや遅い1月6半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が22.2～33.3%、発病葉率が0.6～4.5%と、平年(39.4～64.2%, 3.9～16.9%)に比べてやや低かった。

(24) 冬春キュウリ・ミナミキイロアザミウマ (令和3年度産)

平年より遅い3月4半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が22.2～50.0%、寄生葉率が0.2～5.5%と、平年(39.6～52.8%, 5.9～11.9%)に比べてやや低かった。なお、被害果は巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(25) 冬春キュウリ・タバココナジラミ (令和3年度産)

平年よりやや遅い12月4半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が0～25.0%、寄生葉率が0～2.0%と、平年(7.8～20.8%, 0.2～1.0%)並であった。

(26) 夏ネギ・さび病

平年並の4月6半旬に発生を認め、5月6半旬まで発生圃場率が22.2～33.3%、被害株率が0.4～0.9%と、平年(9.2～22.6%, 0.9～5.4%)並の発生であった。

(27) 夏ネギ・べと病

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(28) 夏ネギ・ネギアザミウマ

平年並の4月6半旬に発生を認め、5月6半旬まで発生圃場率が66.7～88.9%、被害度が2.3～5.8と、平年(81.6～94.1%, 5.4～11.5)に比べてやや低かった。

(29) 秋冬ネギ・黒斑病

平年より遅い9月6半旬に発生を認め、10月6旬まで発生圃場率が11.1%～22.2%、発病度が0.1～0.2と、平年(5.6～10.0%, 0.0～0.2)に比べてやや高かった。

(30) 秋冬ネギ・ネギアザミウマ

平年並の7月6半旬に発生を認め、10月6半旬まで発生圃場率が22.2～55.6%、被害度が0.2～4.4と、平年(34.4～64.4%, 1.3～3.2)並であった。

(31) 秋冬ネギ・ネギハモグリバエ

平年並の7月6半旬に発生を認め、10月6半旬まで発生圃場率が22.2～44.4%、被害度0.2～0.4と、平年(68.3～86.7%, 8.1～10.9)に比べて低かった。

(32) 秋冬ネギ・シロイチモジヨトウ

平年並の7月6半旬に発生を認め、9月6半旬まで発生圃場率が33.3～55.6%、寄生株率が1.1～6.7%と、平年(26.9～56.9%, 1.1～5.1%)並であった。また、7月から9月のフェロモントラップ定点調査での誘殺数は、2,955頭と、平年(1,984頭)に比べて多かった。

(33) 冬春ホウレンソウ・べと病 (令和3年度産)

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(34) 冬春ホウレンソウ・アブラムシ類 (令和3年度産)

平年並の10月6半旬に発生を認め、3月6半旬まで発生圃場率が9.1～57.1%、株当たり寄生虫数が0.0～0.1頭と、平年(12.2～46.8%, 0.0～0.3頭)並であった。

(35) 冬春イチゴ・うどんこ病 (令和3年度産)

葉での発生は、平年より遅い11月6旬に発生を認め、3月4半旬まで、発生圃場率が7.7～14.3%、発病葉率が0.1～0.5%と、平年(2.1～4.3%, 0.1～0.2%)に比べてやや高かった。

果実での発生は、平年よりやや早い12月4半旬に発生を認め、1月6半旬まで発生圃場率が7.7%、発病果率が0.1%と、平年(0～0.7%, 0～0.0%)に比べて高かったが、その後、発生は認められなかった。

(36) 冬春イチゴ・炭疽病 (令和3年度産)

簡易エタノール噴霧法で炭疽病菌の潜在感染検定を実施した結果、7月3半旬の子苗で潜在感染圃場率が84.6%、感染株率が0～95.0%であったことから、8月3日付けで技術情報を発表した。

育苗圃場では7月6半旬に発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が7.7～14.3%、発病株率が0.4～3.4%と、平年(3.6～7.1%, 0.0～0.2%)に比べてやや高かった。

本圃では平年並の9月6半旬に発生を認め、12月4半旬まで発生圃場率が7.7～25.0%、発病株率が0.0～0.3%と、平年(2.9～10.1%, 0.0～0.2%)に比べてやや高かった。

(37) 冬春イチゴ・アブラムシ類 (令和3年度産)

平年よりやや遅い10月6半旬に発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が0～38.5%、寄生株率が0～9.5%と、平年(22.1～26.7%, 3.0～5.0%)並であった。

(38) 冬春イチゴ・ハダニ類（令和３年度産）

育苗後半の 8 月 6 半旬に発生を認め、発生圃場率が 42.9%, 寄生株率が 11.0%と, 平年(37.5%, 5.4%)並であった。

本圃では平年並の 9 月 6 半旬に発生を認め, 3 月 4 半旬まで発生圃場率が 7.7～46.2%, 寄生株率が

0.2～11.8%と, 平年(16.4～70.0%, 3.7～20.2%)に比べて低かった。

(39) 冬春イチゴ・アザミウマ類（令和３年度産）

平年並の 12 月 4 半旬に発生を認め, 3 月 4 半旬まで発生圃場率が 0～42.9%, 寄生花率が 0～5.6%と, 平年(7.1～42.9%, 0.3～2.9%)並であった。

令和4年度 主要病害虫発生状況(徳島県)

単位: ha

作物名 (作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要	作物名 (作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要
早期水稻 (3,930)			かき (211)		
葉いもち	1,620	並	炭そ病	35	並
穂いもち	1,310	並	うどんこ病	140	並
紋枯病	690	並	角斑落葉病	140	並
黄化萎縮病	0	並	円星落葉病	0	やや少
ニカメイガ	0	並	カメムシ類	140	やや多
セジロウンカ	1,390	少	冬春トマト※2 (36)		
トビイロウンカ	0	並	疫病	0	やや少
ツマグロヨコバイ	1,620	並	灰色かび病	5	並
イネクロカメムシ	0	やや少	葉かび病	5	並
斑点米カメムシ類	3,005	やや多	タバココナジラミ	35	多
コブノメイガ	0	少	夏秋ナス (75)		
イネミズゾウムシ	1,310	並	うどんこ病	30	やや少
イチモンジセセリ	230	並	ミナミキイロアザミウマ	20	やや多
普通期水稻 (6,400)			オオタバコガ	55	多
葉いもち	3,340	並	ハスモンヨトウ	75	多
穂いもち	1,920	やや少	ハダニ類	40	並
紋枯病	3,615	並	ニジュウヤホシテントウ類	20	並
ごま葉枯病	855	やや多	冬春ナス※2 (16)		
縞葉枯病	0	やや少	灰色かび病	5	並
稲こうじ病	1,395	多	うどんこ病	5	並
セジロウンカ	2,505	少	すすかび病	15	並
トビイロウンカ	0	やや少	ハダニ類	10	多
ツマグロヨコバイ	4,480	並	ミナミキイロアザミウマ	5	少
イネクロカメムシ	0	少	冬春キュウリ※2 (30)		
斑点米カメムシ類	5,290	多	べと病	30	並
コブノメイガ	555	やや少	うどんこ病	25	やや少
イネミズゾウムシ	1,165	やや多	灰色かび病	0	やや少
イチモンジセセリ	280	並	褐斑病	15	やや少
さつまいも (1,090)			アブラムシ類	5	やや少
ナカジロシタバ	340	やや多	ミナミキイロアザミウマ	5	やや少
イモキバガ	395	並	夏ネギ (54)		
ハダニ類	365	やや少	べと病	0	やや少
タバココナジラミ	635	並	さび病	20	並
かんきつ※1 (1,088)			ネギアザミウマ	40	やや少
そうか病	815	多	秋冬ネギ (113)		
黒点病	180	並	べと病	0	並
かいよう病	240	並	さび病	0	並
アブラムシ類	440	少	ネギアザミウマ	60	並
ミカンハダニ	530	並	冬春ホウレンソウ※2 (408)		
ミカンハモグリガ	885	やや少	べと病	0	やや少
なし (200)			アブラムシ類	235	並
黒星病	0	並	シロオビノメイガ	35	並
赤星病	175	並	冬春イチゴ※2 (73)		
うどんこ病	125	やや少	炭そ病	20	やや多
カメムシ類	0	やや少	うどんこ病	10	やや多
ナシヒメシンクイ	0	並	灰色かび病	5	並
ハダニ類	150	並	アブラムシ類	30	並
アブラムシ類	125	やや多	ハダニ類	30	少
			アザミウマ類	30	並
			ハス (526)		
			褐斑病	380	並
			ハスモンヨトウ	450	やや少

※1 温州みかん、スダチに限る。※2 令和3年度産